

令和4年度 第2回
勝尾城筑紫氏遺跡保存整備委員会

【会議次第】

議 題

筑紫氏館跡地区の発掘調査について(現地視察)

■日 時 令和5年1月30日(月) 13:30~16:30

■会 場 鳥栖市役所 1階第1会議室

鳥 栖 市 教 育 委 員 会

勝尾城筑紫氏遺跡保存整備委員会委員名簿

(敬称略)

氏名	専門分野	所属・役職
(会長) 市村 高男	中世史	高知大学名誉教授
(副会長) 永渕 益雄	地元代表	勝尾城史跡を守る会
薛 孝夫	植生誘導 森林生態	元九州大学大学院准教授
磯村 幸男	文化財行政	元文化庁主任調査官
堀本 一繁	中世史	福岡市博物館学芸員
岡寺 良	考古学	九州国立博物館企画主査
末次 大輔	土木工学	宮崎大学教授

○任期 令和4年7月1日～令和6年6月30日(2年間)

令和4年度 筑紫氏館跡地区の発掘調査について

【調査に至る経緯】

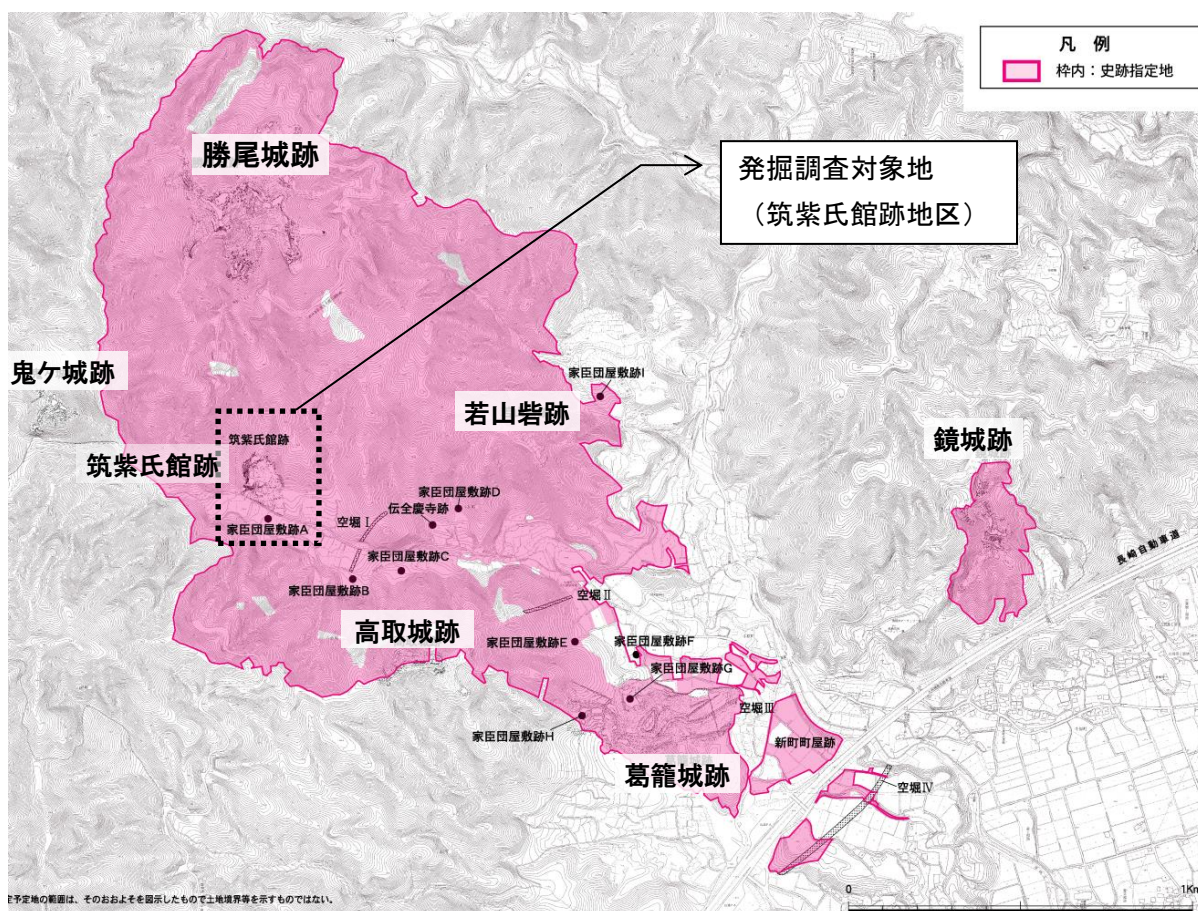
筑紫氏館跡地区の発掘調査は、平成7・11年度に国庫補助事業として実施しているが、館南東部一帯は、当時は私有地であったため、トレンチを十分に設定できず4カ所の調査にとどまっている。

その後、平成29年度に館南東部を公有化し、雑木の伐採や下草刈等を行い、周辺を踏査したところ、通路や虎口と思われるような箇所が表面観察できるようになった。

【調査の目的】





これまで未解明地であった館南東部の遺構状況の把握を行う。令和4年度と5年度の2か年計画で当該地区の調査を行う。

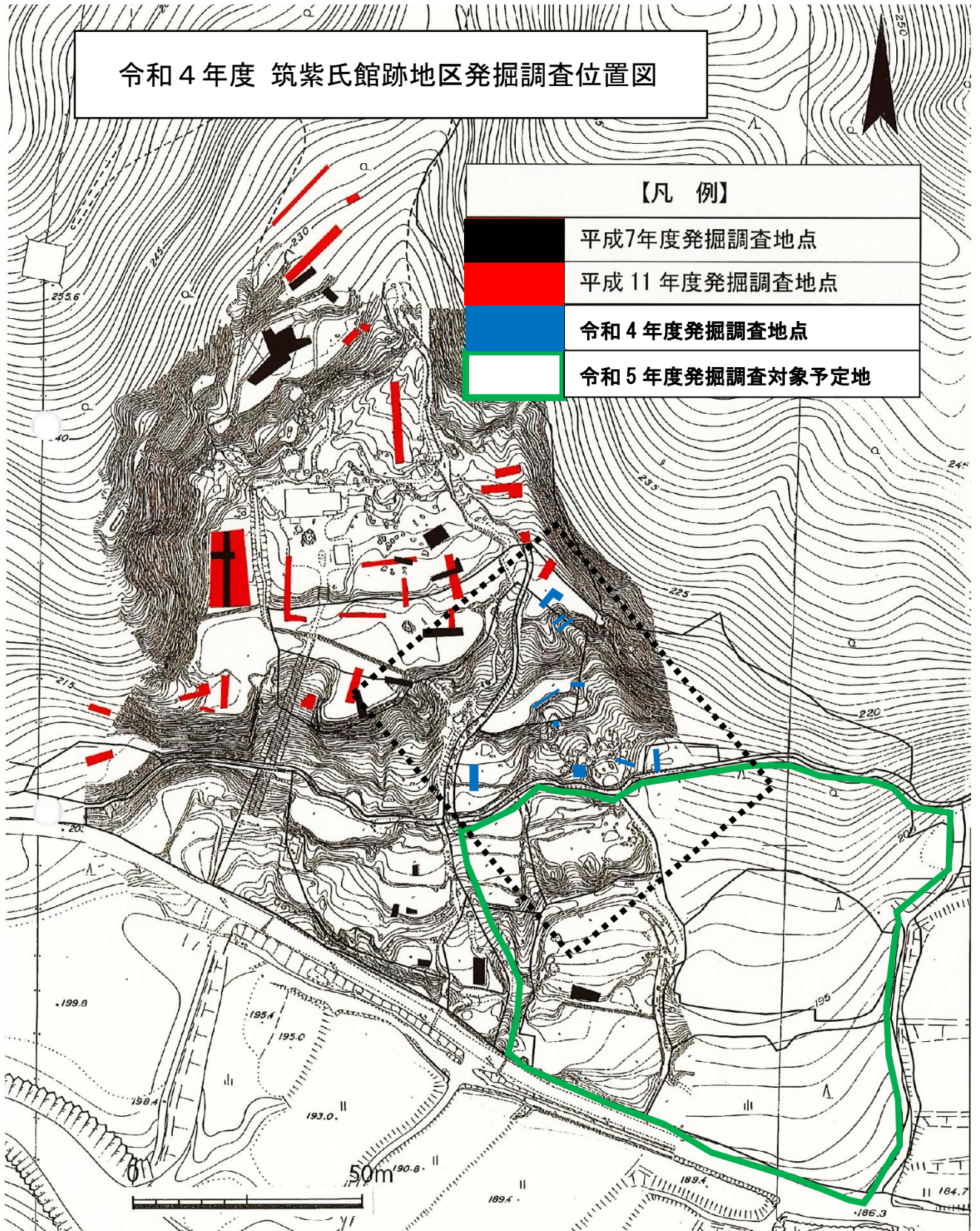
なお、新たに遺構が検出された場合は、その保存方法も含めて将来の史跡整備に反映していく。



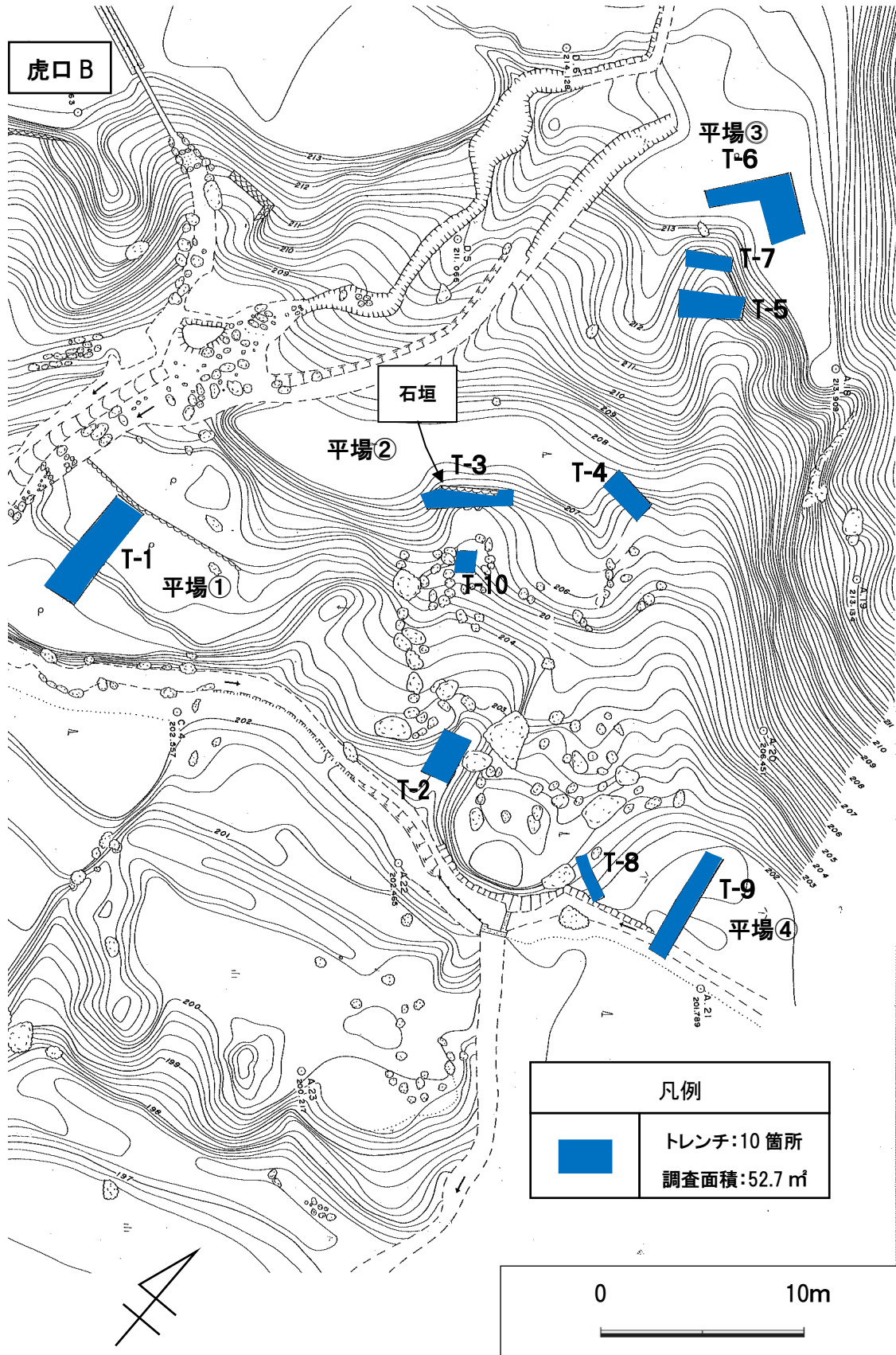
令和4年度 筑紫氏館跡地区発掘調査位置図

【凡例】

	平成7年度発掘調査地点
	平成11年度発掘調査地点
	令和4年度発掘調査地点
	令和5年度発掘調査対象予定地



令和4年度 筑紫氏館跡地区発掘調査トレンチ位置図(詳細)



令和4年度 筑紫氏館跡地区発掘調査の概要

トレンチ 番号	規模 (m)	調査目的	調査所見	資料 頁
T - 1	7×2	館主要部の虎口Bに東に隣接する重要地点に位置し、現況で石垣が1～2石露出していることから、石垣の埋没状況（規模・構築状態）の確認と畧段状の平場（2段）の性格を解明するため、南北方向に長いトレンチを設定し調査を行った。	・現地表面約60～90cm下で、戦国期と考えられる面を確認 ・遺物は瓦、陶磁器、土師器が出土。	6
T - 2	3×2	大きな岩（4石）の間に窪み地があり、トレンチ2から約20m離れた野面積みの石垣（トレンチ3）に至るまでクランク状の通路的な様相がうかがえるため、その状況の把握を行った。	・現地表面約60cm下で、石敷きと粘質土を検出。 ・遺物は瓦、陶磁器、土師器が出土。	6
T - 3	5×0.5	現況で野面積みの石垣が露出し、視認できる規模は高さ約1.2m、幅約4mを測る。石垣の西側端部から南に土畧状が延伸する。石垣下部が流入土の堆積で埋没しているため、本来の石垣の基底面と石垣の長さを確認するため調査を行った。	・現地表面約30cm下で、恐らく崩壊した石垣の石材が多数検出。石垣の長さは約5.2m。 ・現状の石垣段数は7段か。 ・遺物は瓦、土師器等が出土	7
T - 4	2×0.7	トレンチ3の野面積みの石垣から東に折れてすぐ北に進むと、平場②に取りつき易い窪み地が認められたため、調査を行った。	・現地表面約15cm下で、多くの礫と瓦片が数点出土。明確遺構は確認できなかった。	8
T - 5	1.5×4	現況で谷状の窪みとなり平場③からは急傾斜地になっている。この谷状の地形が自然崩壊によるものか、人為的なものかを確認するため調査を行った。	・現地表約40cm下で礫と瓦片が検出。地山整形した遺構と確認。 ・遺物は瓦と土師器が出土。	8
T - 6	3.5×5 L字状	平場②から北に約15m離れ、今回の調査対象地内では最も高所（標高約213m）に位置し、館主要部とほぼ同じ高さにあたる。平成11年度調査では、当該地点の北端部で瓦が出土している。平場③は面的な広がりあることから、建物等の遺構が残存する可能性があるため調査を行った。	・現地表約20cm下で、硬化面（整地面）を確認。建物に伴う柱穴や礎石は確認していない。 ・遺物は瓦が出土（他地点より遺物は少ない）	9
T - 7	1×2.5	トレンチ5の北約2mの地点に設定し調査を行った。トレンチ5より通路と考えられる面が検出されたことから、その延伸状況を把握するための調査を行った。	・現地表約80cm下で、扁平石が1石と瓦片を確認。 ・遺物は瓦と土師器が出土。	9
T - 8	3×0.5	現地表面で瓦片が多数散布する傾斜地であったため、その状況把握を行った。	・明確な遺構は検出されなかったが、瓦が多数出土。 (コンテナ1箱分)	10

T - 9	6.5×1	平場④（長軸約9m、短軸約4m）は、筑紫氏が四阿屋神社から勧請した勝尾神社跡と伝えられ、地表面に瓦が多数散布していることから、建物等の遺構が認められる可能性が高いため調査を行った。	・現地表面下約20cmで、硬化面を確認。トレンチ内南側の約1/2で大量の瓦片と少量の陶磁器片が検出（整地面か）	10 ・ 11
T - 10	1×1	トレンチ3で石垣が崩壊した石材により、石垣の基底部の確認が出来なかったため、トレンチ3の南側約4mの地点にトレンチを設定した。	・現地表面下の約15cmで、硬化面を確認。	11

以上が今年度の調査概要であり、現在以下の4点が明らかとなっている。

（1）トレンチ1の石垣の段数は3段で、残存する石垣の高さ約0.8mを測る。石垣上部は後世の改変を受けていると見られ、石垣の石材と思われる礫が石垣下部に散乱している。トレンチ内の北側では現地表面下約0.6mで、やや緩斜面であるが戦国期の面が検出された。トレンチ南側では現地表面下約0.9m掘り下げたところ、排水路的な様相のものが認められた。

（2）トレンチ2の発掘調査の遺物は少量であったが土師器皿と瓦が出土した。これまで平成7年度と11年度の館主要部の調査で出土した遺物と同形のものであり、概ね16世紀代であると考えられる。近世以降の遺物は確認されていない。また、地山面と考えられる粘土層と石敷きが一部認められ、径約60～70cmの角が取れた丸い形状の石材が1石検出された。

（3）トレンチ5と7を設定した谷部の地形は、当初は大雨等の流水による崩壊ではないかと考えていたが、地山整形の通路遺構として判断をしている。遺物は少量で土師器と瓦が認められ、（2）と同時期であると考えられる。このことから、館主要部（城主の居館）から勝尾城に至る通路とは別の通路になることが判明した。

（4）トレンチ9の平場④は、現況で面的に広い空間地で、伝承で勝尾神社跡といわれている場所である。約20cm掘り下げで固く締まった整地面を検出したが、トレンチ9の南側半面から大量の瓦片を検出した。その状況から推測して、整地面を安定させるための補強材的なものとして転用されたのではないかと思われる。検出した瓦と陶磁器は中世のものと判断されることから、この平場④に中世以降の何らかの建物があった可能性が高い。



1. トレンチ1 (東から)



2. トレンチ2 (南から)



3. トレンチ3 調査前（南から）



4. トレンチ3 調査中（南から）



5. トレンチ4 (東から)



6. トレンチ5 (西から)



7. トレンチ6 (北から)



8. トレンチ7 (西から)



9. トレンチ8 (南から)



10. トレンチ9 (北から)



11. トレンチ 9 (西から)



12. トレンチ 10 (南から)

令和4年度 筑紫氏館跡地区 想定通路図



0 2 10 30m 40m

- 館主要部への想定通路
- 今回調査で判明した通路